

40	福岡教育大学附属福岡小学校	R1～R4
----	---------------	-------

令和 4 年度研究開発実施計画書

1 研究開発課題

未来社会を創造する主体に必要なとなる非認知能力を重視した資質・能力を育成するため、子供の文脈を中心に据えた 7 つの新教科の枠組みを構築する研究開発。

2 研究の概要（別紙 1：研究の概要図 ※様式自由）

未来社会を創造する主体となる子供の「省察性」「協働性」「創造性」の 3 つの資質・能力を育成するための教育課程の実効性を高める。①非認知能力を重視した 3 つの資質・能力の発揮を促す本校版学習指導要領の作成，②テーマ学習，リレーション学習，フォーカス学習の 3 つの学びで創るカリキュラム・デザイン，③アセスメントを基にカリキュラム改善サイクルによる本校教育課程の教育評価である。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

未来社会を創造する主体となる資質・能力を育成するために、「人間」「社会」「言葉」「数学」「科学」「芸術」「健康」の 7 つの新教科において、以下の 3 つの視点から非認知能力を重視した資質・能力を育成する。

- 知の構造を基にした内容の設定
- 子供の文脈を重視したテーマ学習，リレーション学習，フォーカス学習の設定
- アセスメントを基にしたカリキュラム改善サイクル

このことにより、本研究において、資質・能力を育成するための内容設定の在り方，カリキュラム・デザインの在り方，カリキュラム評価の在り方について、成果と課題が明確になり、公立学校における資質・能力育成に関わる創造的なカリキュラム・マネジメントの推進や、子供の主体的な学びの実現，授業時数削減，教員の働き方改革に資することができると思う。

（2）必要となる教育課程の特例

上記の取組を行う上で、次の 3 つの教育課程の特例が必要である。

- | |
|--------------------------------|
| ① 本校独自の資質・能力の規定 |
| ② 教科の本質である見方・考え方を基にした 7 教科の枠組み |
| ③ クラブ活動に代わる 4～6 年生の「チャレンジ」の設定 |

① 本校独自の資質・能力の規定

本研究で目指す「自らの意志で社会を切り拓き，仲間や多様な他者と共に力を合わせたり，自分の学びを見つめたりすることで，新たな価値を創り出そうとする子供」は次の 3 つの資質・能力から見取る必要があると考えている。

省察性	自分の学び方や在り方を深く内省し，自分のよさや課題も肯定的に受けとめ，これからの志を明らかにしていく資質・能力
協働性	異なる他者の存在を受け入れ，他者と共に力を合わせ働きかけようとする資質・能力
創造性	自ら課題を設定し，調査・追究する過程で自分の獲得した知をつないだり組み合わせてたりしながら概念を発展させ，新たな知を創造する資質・能力

② 教科の本質である見方・考え方を基にした7教科の枠組み

教科の本質である見方・考え方を整理し、それを基に「人間」「社会」「言葉」「数学」「科学」「芸術」「健康」の7つの新教科で教育課程を編成し、内容のスリム化を実現することで授業時数削減を図る。

③ クラブ活動に代わる4～6年生の「チャレンジ」の設定

子供一人一人が得意とすることは違っているように、教育課程の中で、子供たちそれぞれの個性を生かして、自分の資質・能力を磨き伸ばすことが重要である。そこで我が国においても実施された選択教科や部活動など、よさを受け入れつつも、教育課程内に個々の多様な資質・能力を伸ばすことができるようにする時間としての「チャレンジ」を行い、学びの最適化を図る。

(3) 研究成果の評価方法

未来社会を創造する主体となる資質・能力が7つの新教科の設定やカリキュラム・デザインによって育成できたかどうか、次の4点から仮説検証する。

- 3つの資質・能力について、年3回の児童質問紙調査、保護者質問紙調査、教師の自己評価を行い、全学級における変容をデータ化する。
- 現行及び新学習指導要領の方向性を踏まえた全国学力・学習状況調査の経年比較を行い、変容をデータ化することで、内容精選を行った本校の教育課程の精度を測る。
- 運営指導委員会を年間複数回開催するとともに、福岡教育大学、福岡県、福岡市教育委員会などの学校関係者による共同研究会を同時に開催し、本校教育課程の実効性を検証する。
- カリキュラム改善サイクルを基に、本校のカリキュラム評価を行い、その実効性を検証する。

以上のようにデータを集積し、実効性のある教育課程になっているのか、定性的、定量的に評価する。また、その成果を研究発表会等で公開し、参会者の是非を問い、評価に加味する。

4 研究計画等

(1) 前年度までの研究開発の概要

前年度は、アセスメントを基にしたカリキュラム・デザインの在り方を検証した。アセスメントを基にしたカリキュラム・デザインとは、多様な資料から子供を観察し、解釈し、明らかにした学びの様子から、子供がより資質・能力を発揮できるようなカリキュラムに変更、更新することである。具体的には以下の3つである。

- ① アセスメントを支える基準合わせ
- ② 教科や学年に適したアセスメントの方法の選択
- ③ アセスメントによるカリキュラム改善サイクル

① アセスメントを支える基準合わせ

教科担任制である本校において、1つの学年のカリキュラムに関わる教員は多数いる。その教員がカリキュラムを子供の姿から評価するためには、「どのような子供の姿を目指しているのか」を明確にし、共有する必要がある。この「基準」が教師によって違うとカリキュラムの評価を適切に行うことができない。そこで、「どのような子供の姿を目指すか」をより明確にし、共有することを「基準合わせ」と呼び、2つの側面から整理する。1つは、教師間・教師子供間における目指す姿の共有である。「教師間」で共有する目的は、作成、実施したカリキュラムが有効であったか、子供の学びの姿から適切に判断するためである。「教師子供間」の共有の目的は、子供の求めを大切にされたカリキュラムに変更、更新していくためである。2つは、各教科のルーブリックの作成である。これは、6年間のその教科のカリキュラムによって、どのような姿を目指しているか明らかにすることである。これらによって、子供の資質・能力育成につながるカリキュラムか判断できるようになる。

ア 教師間・教師子供間における目指す姿の共有

本校の学校教育目標は「未来社会を創造する主体の育成」である。つまり、本研究の主題であり、創造性、協働性、省察性の3つの資質・能力を発揮する子供である。その実現に向けて、教師は各学年のテーマを設定する。これは、4月当初に子供たちから集めた「1年後、このような姿になっていたたい」という願いを基に、設定する（教師子供間の共有）。子供たちの求めには協働性や省察性（非認知能力）に関わることが多く含まれる。目指す子供の姿をテーマとして設定し、アセスメントしようとすることは、非認知能力の育成と発揮をとらえる上でも価値がある。そして、このテーマを実現することは、子供の願いを実現することであり、子供がカリキュラムに価値を見出すことにつながる。そのために教師間ですべきことは、2つある。

- ・ テーマが実現したときの姿を具体化（発言、記述、行動など）し、教師間で共有する。
- ・ 共有した目指す姿の具体を、見直しながら子供の実態に応じて、教師間で更新する。

以上のことを学年内で共有しながら、子供と関わる中で定期的に更新し、年度末に現れる子供の姿からカリキュラムを評価できるようにしていく。

イ 各教科のルーブリックの作成

各教科には、育成したい資質・能力がある。その資質・能力がカリキュラムの中でどのように発揮されているか定期的に評価することで、カリキュラムの変更、更新へとつなげる。昨年度までの本研究の課題は、年間レベルで資質・能力の発揮を捉えることができていなかったことである。そこで、各教科が6年間で育みたい資質・能力を5段階のルーブリックとして設定することで、どの学年のどの場面においても評価できるようにする。6段階ではないのは、子供の資質・能力は学年があがる度に自動的にあがるものではなく、個に応じてその成長には違いがあるからである（なお、5段階としているが、設定する中で系統性などに応じて4段階や3段階が適していると判断した場合、4段階や3段階でも設定している）。

また、このルーブリックを教科毎に作成することによって、教科の目指す姿がより具体的

になると共に、非認知能力である協働性や省察性の具体的な姿を示すことができるようになる。非認知能力をどのように評価するのかについても明らかにしていくことができると考える。

以上の2つの「基準合わせ」を基に、アセスメントを行い、カリキュラムの変更、更新へとつなげる（図1）。

② 教科や学年に適したアセスメントの方法の選択

子供たちの学習状況を多角的に捉える方法は様々あるが、その方法を教科の特性や学年段階などに応じて選択することが、子供たちの状態を的確に捉える上で重要である。そこで、各教科や学年における適切なアセスメントの方法とそれを活用するタイミングを明らかにしたい。適切な方法を選択することで精選された情報を基に教師は支援を考えることができ、働き方改革へともつながる。また、アセスメントを行う適切なタイミングを明らかにすることで、効果的なアセスメントを行い、カリキュラムを変更、更新に生かすことができるようにしたい。アセスメントの方法を大きく2つ考えている。パフォーマンス評価とポートフォリオ評価である。

パフォーマンス評価とは、資質・能力の発揮を促すパフォーマンス課題における子供の様子を観察・解釈する評価方法である。ここでは、ルーブリックの設定とそれに伴うモデレーション、ルーブリックの各段階を示すアンカー作品が必要となる。本研究においては、特にモデレーションを重視する。モデレーションとは「評価統一のための手続き」である。具体的には、授業者が



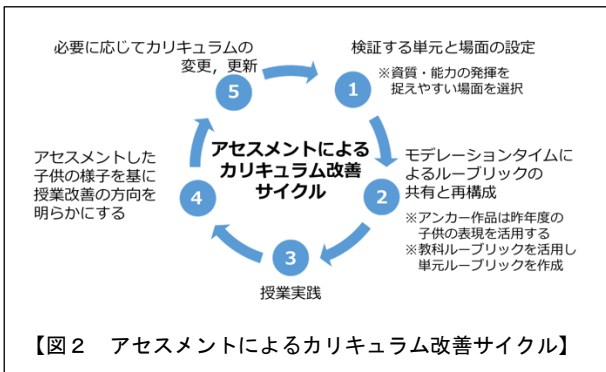
作成したルーブリックをカリキュラムに関わる教師間で共有し、同じ子供の姿をイメージできるのかルーブリックを修正する。

ポートフォリオ評価とは、ポートフォリオと呼ばれる子供の作品や学習の記録を系統的に蓄積したものを基に、子供自身が学習の在り方について自己評価することを促す評価方法である。ここでは、子供との意義の共有、子供が蓄積した作品を編集するための機会の設定、子供のポートフォリオ検討会が必要となる。子供とどのように意義を共有し、何を集め、どう編集し、検討するのか、そしてこれからの学習にどのように生かすことができるのかも明らかにする。ICTも活用しながら、子供たちの学びの蓄積をすることによって、教科の見方・考え方の自覚や資質・能力の発揮の実感を促すことができると考える。

③ アセスメントによるカリキュラム改善サイクル

カリキュラム・デザインにアセスメントを生かしていくためには、具体的なカリキュラム改善サイクルが必要となる。以下のようなサイクルで、カリキュラムの変更、更新を行う（図2）。

まず、検証する単元と場面を設定する。それぞれの教科の学習の中で、最も資質・能力の発揮が期待できる単元とその場面を設定する。また、3つの学習（テーマ、リレーション、フォーカス）にも留意して設定する（図2の①）。テーマ学習やリレーション学習であれば、ダイナミックな活動展開となり、子供の資質・能力が発揮されやすい。また、フォーカス学習であれば、目指す資質・能力を焦点化している分、資質・能力の発揮の有無を捉えやすい。効果的なアセスメントを期待することができる。次に、モデレーションタイムによるルーブリックの共有と再構成を行う（図2の②）。ここでは教科ルーブリックを活用して作成した単元ルーブリックとそれを具体化したアンカー作品を示す。子供の表現（ノートの記述、ビデオ記録した発言や動き、作品など）をアンカー作品として、授業者の求める姿を説明し、参観者と共有する。このモデレーションタイムはあくまでも、授業者の目指す姿を共有するためのものであり、学習計画や指導案の検討会ではない。



授業者と参観者はモデレーションタイムで共有した目指す子供の姿から子供たちの様子を観察する（図2の③）。本年度、実証授業の整理会は公開した翌日に設定している。撮影した動画から解釈を行い、翌日の授業整理会に参加する。授業整理会では、授業者、参観者の観察、解釈を共有し、そのズレや共通点を整理することによって、改善の方向性を見いだす。そして、次年度の実践にどのようにつなげるかといった視点で成果と課題を整理し、必要に応じてカリキュラムの変更、更新を行う（図2の④⑤）。授業者は単元終了後、子供たちの表現を次年度のアンカー作品として記録し、次年度のカリキュラムの変更、更新に活用できるようにする。

④ カリキュラムの変更、更新の具体

カリキュラムの変更、更新をする場合、3つのパターンがあると考え（表1）。

パターン1の変更、更新が最も大きく、研究開発学校指定を受けている本校ならではのカリキュラム改善と言える。一方、パターン2や3は多くの学校でもできる部分のカリキュラム改善と考える。パターン1の変更、更新をすれば、必然的に2や3に影響が出る。2の変更、更新をすれば3に影響が出る。変更、更新する必要がある場合も含め、変更、更新について考えることができる。

【表1 カリキュラムの変更、更新のパターン】

パターン	変更、更新する対象
1	学習指導要領に含まれる目標や内容
2	年間指導計画内の単元配列
3	3つの学びの選択や単元構成、活動構成

以上のような本年度の取組によって見られた成果と課題は以下である。

<成果>

- カリキュラムの変更，更新につながるアセスメントを行うためには，「基準合わせ」を教師間・子供教師間で行い，定期的に行い共有（学年会やモデレーションタイムにて）することが有効であること
- 各教科には主に育成したい資質・能力が位置付けているが，その育成には主として設定していない他の二つの資質・能力（非認知能力）の発揮が重要であり，各教科においてその関係性に特性があるということ
- 非認知能力（本校での省察性，協働性）の育成は一単位時間，一単元で目指すものではなく，テーマ学習のような教科横断的な学習や年間を通して行う必要があること
- 非認知を含む資質・能力の育成には，教師間の情報共有と学び合う関係性が重要であり，そのような組織が子供たちの資質・能力を育成するカリキュラムづくりの土台となることが分かってきたこと

<課題>

- カリキュラムの変更，更新を判断する場面（総括的に評価する場面）として，本年度は実証授業と教育研究発表会における公開学習場面とした。しかし，その場面の選択にどのような条件が必要であったのか明らかになっていない。
- 非認知能力（本校での省察性，協働性）の育成には長いスパンによる取り組みが関係していることが分かってきたが，子供の文脈を重視した3つの学習を始め，各教科における活動構成や単元構成との関係性について明らかになっていない。
- 本年度のカリキュラムの変更，更新の考察については，現段階では十分とは言えず，年度の終了時，並びに次年度の子供の様子などから考察する必要がある。
- このカリキュラムについて，多角的に分析するために，現在の保護者への十分な説明と共に，卒業生やその保護者などからヒアリングもを行い，本校のカリキュラムと資質・能力の育成の関係を捉える必要がある。

(2) 当該年度の教育課程の内容

表2 教育課程の内容

教科	内容
人間	人間としての学びである，人格の完成に直接向かう，全教科の核となる教科である。本教科では，自己内省を繰り返し，多様な他者と協働的に実践する活動を通して，人間として生きる価値を見だし，自己形成を図る主体を養うことを目指す。特に，集団や社会に進んで参画し，相手の立場や考えを尊重しながら，自分の考えや望みを伝え，自分の役割の責任を果たす協働性と，あるがままの自分を受けとめることで自分の特徴を理解し，あるべき自分を思い描いた生活の実現に努める省察性の育成を重視する。
社会	子供と生活や社会との接点を基に各教科を関連させる横断の役割を担う教科である。本教科は，日常や社会の生活における問題を見だし，解決に向けて参画する活動を通して，日本を土台に世界に貢献する主体としての自覚や責任を培うことを目指す。特に，日常や社会の生活における自己の役割や義務に気付き，日本に住む人間として深い知見や良識をもって行動する協働性の育成を重視する。
言葉	過去と未来，自分と世界の人と人がつながるために必要な言語という文化的側面を学ぶ教科である。本教科では，ことばに関する課題を捉え，その解決を図る言語活動を通して，主体的なことばの使い手を養うことを目指す。特に，ことばに関する課題について，筋道立てて表現したり，新たな自分の考えを創り出したりする創造性の育成を重視する。
数学	人間の世界や地球，宇宙の原理を明らかにする数，量，形という文化的側面を学ぶ教科である。本教科では，数や形に親しみ，事象を数理的に捉え，問題を他者とともに解決する活動を通して，自ら問いを見だし，直観的，論理的に推論する力を身に付けることを目指す。特に，事象から数や形，量についての問題から，直観的思考や論理的思考を通して，新たな考えや価値を見いだす創造性の育成を重視する。

科学	自然や科学技術という未来を生きる人間に欠かせない文化的側面を学ぶ教科である。本教科では、自然の事物・現象に親しむことから課題を立て、課題解決に向けて粘り強く探究し、知を再構成しながらより妥当な考えを創り出す力を養うことを目指す。特に、課題解決に向けて、根拠を明確にして追究し、比較、関係付け、帰納的、演繹的に分析・考察して、より妥当な考えを創る創造性の育成を重視する。
芸術	自らの表現欲求や人間が生み出してきた芸術の中にある文化的側面を学ぶ教科である。本教科では、感性を働かせ、ひと・もの・ことから美を感じたり、イメージしたことを造形や音楽を中心に表現したりする活動を通して、生活や社会の中の美と豊かに関わることを目指す。特に、諸感覚を働かせながら表現素材に関わり、よさや美しさを感じ取るとともに、造形や音楽による表現に関する知識及び技能を習得・活用しながら、表現をつくりだす創造性の育成を重視する。
健康	子供の心身の健康という生きる上での基盤となる自立的な生活を営む上において重要な教科である。本教科では、自分の身体や生活環境に関わる課題解決に向けた体験的な活動を通して、望ましい生活行動を実践しようとする態度を身に付けることを目指す。特に、健康課題を解決する必要性を感じながら自分なりの解決方法を考え、望ましい生活行動を実践しようとする創造性の育成を重視する。
チャレンジ	子供たちの個性に応じた領域学習の発展的な学びである。子供一人一人が得意とする知能は違っている。教育課程の中で、子供たちそれぞれの個性を生かして、自分の資質・能力を磨き伸ばし、教育課程内に個々の多様な資質・能力を伸ばす。

(3) 全課程の修了認定の要件

特に規定なし。

(4) 年次研究計画

第一年次	1 3つの資質・能力を育む7つの教科を教科の本質である見方・考え方から設定し、内容の設定を行い、子供の文脈を重視した3つの学びを整理すること	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知の構造を基にした各教科の内容設定 ・ テーマ学習、リレーション学習、フォーカス学習の設定 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p>テーマ学習とは、子供と教師で設定した学年テーマの実現を目指し、各教科が解決のための役割を果たしながら1つのプロジェクトとして教科横断的に進める学びのこと、リレーション学習とは、ある教科で生まれた問いを解決するために、他教科と行ったり来たりしながら合科的・関連的に進める学びのこと、フォーカス学習とは、教科の見方・考え方を基に、概念と方略の獲得に焦点化した学びのこと</p> </div>	
	※ 一単元の構成や教科間のつながりについて明確にしていく。	
第二年次	2 本校の教育課程の実効性を高める年間指導計画等の作成手順を明確にすること	
	【表3 カリキュラム・デザインの基本的な手順】	
	フェーズ	活動と留意点
	1 4月	学級目標と学年テーマを話し合う ・ 学年で目指す姿を明確にし、共有すること
	2 5月 6月	学年テーマからテーマ学習を話し合う ・ 目指す姿に近付くためにどのような学習が必要か考えること ・ 各教科がどのように関連するか考えること ・ 前期後半と後期に1本ずつ設定すること
	3 6月	テーマ学習が各教科の内容を満たすか検討する ・ 子供の文脈を大切に、教科の学習内容を満たす材を探すこと
4 6月	リレーション学習、フォーカス学習を設定する ・ 子供の文脈が形成されるように、単元の配列を変更すること ・ リレーション学習が設定できないものはフォーカス学習とすること	

	5	各学習の実施 ・教師はルーブリックの提示などゴール像を子供と共有すること ・「学習としての評価」を基に、子供自身が学習をコントロールできるようにすること
	6	カリキュラムの見直し ・子供たちの資質・能力の発揮の視点、教科の見方・考え方の育成の視点から単元とその配列などのカリキュラムを評価すること
	※ 1年間のカリキュラムの編成手順を明確にしていく。	
第三年次	3	アセスメントを基にしたカリキュラム改善サイクルの実施すること
		① アセスメントを支える基準合わせ ② 教科や学年に適したアセスメントの方法の選択 ③ アセスメントによるカリキュラム改善サイクル
	※ 次年度に改善すべき点を明らかにする方法を明確にしていく。	
第四年次	4	前年度の改善したカリキュラムを基に、本校が育成を目指す資質・能力の育成につながるカリキュラムを実施と研究の総括をすること
		○ 非認知能力を含む資質・能力を育成するカリキュラムの作成手順、改善サイクルの具体と留意点を整理する。
		○ 現行学習指導要領と本校版学習指導要領を比較し、削除、削減、統合、新規などの点で整理する。
		○ 4年間の児童、保護者質問紙調査の全児童の変容をデータ化する。
		○ 全国学力・学習状況調査の経年比較を行い、変容をデータ化する。
		○ 文部科学省研究開発学校フォーラムにて、4年間の取組を総括する。
	※ 持続可能なカリキュラム・マネジメントの在り方を明確にしていく。	

(5) 年次評価計画

第一年次	1	3つの資質・能力を育む7つの教科を教科の本質である見方・考え方から設定し、内容の設定を行い、子供の文脈を重視した3つの学びを整理すること ・運営指導委員と共同研究者を選定する。 ・児童質問紙と保護者質問紙の質問紙踏査項目を作成する。 ・年3回の児童質問紙調査を行うとともに、年3回の保護者質問紙調査を行い、全学級における変容をデータ化する。
	2	本校の教育課程の実効性を高める年間指導計画等の作成手順を明確にすること ・全国学力・学習状況調査のデータ分析を行う。 ・運営指導委員会を年間複数回開催するとともに、福岡教育大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会などの学校関係者による共同研究会を同時に開催し、本校教育課程の実効性を検証する。 ・年3回の児童質問紙調査、保護者質問紙調査のデータ化を継続する。 ・教師の自己評価についてのデータ化を継続する。
第三年次	3	アセスメントを基にしたカリキュラム改善サイクルの実施すること ・運営指導委員会と共同研究会において、本校教育課程の実効性を検証する。 ・年3回の児童質問紙調査、保護者質問紙調査のデータ化を継続する。 ・教師の自己評価についてのデータ化を継続する。 ・全国学力・学習状況調査の経年比較を行う。 ・各教科や発達段階に適したアセスメントの方法をパフォーマンス評価とポートフォリオ評価から設定し、検証する。

第四年次	<p>4 前年度の改善したものを基に、本校が育成を目指す資質・能力の育成につながるカリキュラムを実施と研究の総括すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究開発実施報告書にまとめる。 ・運営指導委員会と共同研究会を開催し、研究全体の総括評価を行う。 ・卒業生を対象としたヒアリングを行う（チャレンジ学習についても含む）。
-------------	--

5 研究組織

(1) 研究組織の概要

<校外リソース>

○ 運営指導委員会

本校研究に関わる、上智大学 奈須 正裕教授、國學院大學 田村 学教授を筆頭に、福岡教育大学及び福岡教育大学教職大学院、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会から選出された委員から、本校研究についての指導を受ける。

○ 共同研究会

福岡教育大学 教授（准教授）と本校職員OBから組織され、学問的見地と教育実践による裏付けを基に、学びに向かう子供たちの姿について研究協力をいただく。ここでは実効性のある教育課程研究を進めたり、開発授業、評価分析をしたりして進めていく。

○ 授業協力者

同窓会会員や地域の人材バンク（県や市の行政職員、他大学、NPO 法人など）から多数本校にお越しいただいている方々との交流を続け、必要に応じて子供たちが地域に繰り出したり、それらの方を学校にお招きしたりして、子供の求めに応じて、学習を構成できるようにする。

<校内リソース>

○ 学級担任・教科担任併用制

学級担任が朝や帰りの会、給食指導などを中心に進めるが、基本的には各教科の専門の教科担当がどの学級でも指導を行えるようにしている。すなわち、7教科の学習を行うので、通常7名以上の教員が1学級に入る体制を敷いている。このことによって、子供たちに質の高い学習の提供とともに、教師の専門力量の向上にも繋げている。さらに教頭以下の教職員が学習に入る体制を敷いているため、教員の持ちコマを20時間以内に抑えるようにし、空きコマで教材研究や打合せ、取材などを行えるようにしている。こうすることで働き方改革に資するとともに、社会に開かれた教育課程として、学校外のさまざまなリソースへのアプローチも円滑に推進することができるようにしている。

○ 研究部

全体研究構想を作成し、研究全体のマネジメントをおこなうとともに、教科部長会や学年主任会の総括を務めるとともに、学年間、教科間の連携を強めるための役割を担う。基本的には、コーチングを重視した関わりを職員に行い、それぞれの職員が実現したい学習像を明確にし、そのためのアプローチの方法を自覚できるようにサポートする。研究は全体で推進するものであることを強調し、その目的や理念を共有するために関わっていく。

(2) 研究担当者（研究主任の氏名には○印を付すること）

職 名	氏 名	担当学年・担当教科
教 諭	○井手 司	6年・社会科
教 諭	石橋 大輔	2年・算数科
教 諭	西島 大祐	3年・算数科
教 諭	大村 拓也	6年・国語科
教 諭	坂牧 淳	特支・算数科
教 諭	小島 恵太	4年・特別活動

(3) 運営指導委員会

① 組織

氏名	所属	職名	備考(専門分野等)
奈須 正裕	上智大学	教授	教育心理
田村 学	國學院大學	教授	生活科・総合的な学習の時間
石井 英真	京都大学大学院	准教授	教育方法・教育評価
河野麻沙美	上越教育大学	准教授	教育方法・数学・授業研究
福本 徹	国立教育政策研究所	総括研究官	教育工学・特別支援教育
豊畷 啓司	福岡教育大学	教授	社会科・教育方法・中等教育
生田 淳一	福岡教育大学	教授	教育心理・教育評価
樋口 裕介	福岡教育大学	准教授	学校教育・教育方法
芋生 修一	福岡教育大学	特任教授	生活科・社会科・初等教育
高野 誠一	福岡教育事務所	主幹指導主事	社会科・道徳科・初等教育
野口 信介	東福岡特別支援学校	校長	理科・初等教育
三浦 研一	福岡市教育委員会	第一係長	道徳科・総合・初等教育

② 活動計画

月	主な内容	留意点
4月	・研究開発に関わる組織運営についての提案 ・全国学力・学習状況調査	
5月	・研究開発協議会(文部科学省)	※例年通りであれば
6月	・全体研究構想提案 モデル授業 ・実証授業	
7月	・第1回 運営指導委員会 ・児童質問紙調査① ・保護者質問紙調査① ・実証授業	※オンライン併用
8月	・第1回 共同研究会(各教科) ・卒業生へのヒアリング	※オンライン併用
9月	・実証授業	
10月	・実証授業	
11月	・第2回 運営指導委員会 ・第2回 共同研究会(全体) ・研究開発自己評価書, 次年度計画提出	
12月	・研究開発実施報告書作成	
1月	・研究開発フォーラム(学術総合センター) ・研究開発実施報告書提出 ・第3回 共同研究会(全体, 各教科)	※例年通りであれば
2月	・教育研究発表会(第3回 運営指導委員会)	
3月	・研究のまとめ	

福岡教育大学附属福岡小学校 教育課程表（令和3年度）

	各教科の授業時数										総合的な学習の時間	特別活動	新教科							総授業時数		
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳			外国語(科)活動	人間	社会	言葉	数学	科学	芸術		健康	チャレンジ
第1学年	0 (-306)	-	0 (-136)	-	0 (-102)	0 (-68)	0 (-68)	-	0 (-106)	0 (-34)	-	-	0 (-34)	68 (+68)	68 (+68)	204 (+204)	170 (+170)	68 (+68)	102 (+102)	102 (+102)	-	782 (-68)
第2学年	0 (-315)	-	0 (-175)	-	0 (-105)	0 (-70)	0 (-70)	-	0 (-105)	0 (-35)	-	-	0 (-35)	70 (+70)	70 (+70)	210 (+210)	175 (+175)	70 (+70)	105 (+105)	105 (+105)	-	805 (-105)
第3学年	0 (-245)	0 (-70)	0 (-175)	0 (-90)	-	0 (-60)	0 (-60)	-	0 (-105)	0 (-35)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	70 (+70)	210 (+210)	158 (+158)	87 (+87)	105 (+105)	105 (+105)	-	805 (-175)
第4学年	0 (-245)	0 (-90)	0 (-175)	0 (-105)	-	0 (-60)	0 (-60)	-	0 (-105)	0 (-35)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	105 (+105)	210 (+210)	158 (+158)	87 (+87)	105 (+105)	105 (+105)	70 (+70)	875 (-105)
第5学年	0 (-175)	0 (-100)	0 (-175)	0 (-105)	-	0 (-50)	0 (-50)	0 (-60)	0 (-90)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	105 (+105)	210 (+210)	158 (+158)	87 (+87)	105 (+105)	105 (+105)	70 (+70)	910 (-105)
第6学年	0 (-175)	0 (-105)	0 (-175)	0 (-105)	-	0 (-50)	0 (-50)	0 (-55)	0 (-90)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	105 (+105)	210 (+210)	158 (+138)	87 (+87)	105 (+105)	105 (+105)	70 (+70)	910 (-105)
計	0 (-1461)	0 (-365)	0 (-1011)	0 (-405)	0 (-207)	0 (-358)	0 (-358)	0 (-115)	0 (-597)	0 (-209)	0 (-70)	0 (-280)	0 (-209)	428 (+428)	523 (+523)	1254 (+1254)	977 (+977)	486 (+486)	627 (+627)	627 (+627)	210 (+210)	5122 (-663)

※ 授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付いたりゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

学校等の概要

1 学校名、校長名

コクリツダイガクホウジンフクオカキョウイクダイガクフゾクフクオカシヨウガッコウ

学校名 国立大学法人福岡教育大学附属福岡小学校

アイザワ ヒロミツ

校長名 相澤 宏充

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 福岡県福岡市中央区西公園12-1

電話 092-741-4731

FAX 092-741-2553

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常	71	2	70	2	72	2	70	2	72	2	72	2	450	12
帰国	-	-	-	-	1	-	1	-	5	1	1	1	8	2
特支	2	-	2	1	4	-	1	1	2	-	3	1	14	3
計	73	2	72	3	77	2	72	3	79	3	76	4	450	17

※ 1, 2組が通常学級で, 3組が帰国子女学級である。4～6年の3学級のうち3組は児童数が少ない編制となっている。(3年3組1名, 4年3組1名, 5年3組5名, 6年3組1名) 特別支援学級は, 1・2年, 3・4年, 5・6年の3学級の複式編制である。1・2年は4名, 3・4年は5名, 5・6年は5名の計14名である。

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	22	0	1	0	1	2
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	5	0	36						